

「個」と「全」の谷間

— *The Catcher in the Rye* をめぐって —

丸 田 明 生

(1)

The Catcher in the Rye は1951年東洋的思想や禪への傾斜によって知られるJ. D. Salinger によって発表された問題作である。問題作必ずしも売行きがよいとは言えないが、この作品は出版されてから10年間に150万部を売りつくし、なお今日でも相当の売行きを示しており、出版界に賛否両論の批判を巻起している。そしてアメリカばかりでなく世界の各国でも翻訳され著しい反響を呼んでいる。そこには現代人一般の共感を呼ぶ普遍的な問題が造形されているからと思われる。

作品の基本的なパターンは子供の夢と大人の現実の衝突のように思われるが、しかしそれはアメリカ以外の国におけるよりもアメリカではやや特別な意味をもつ。というのはHuck Fin やDeerslayer やNick Adams がたどったAmerican Tradition, 即ち 'Quest' の譜系に連なるからである。Outcast に魅せられてきたアメリカ文学の個人の自由と完成に連なるからである。Huck を例にとれば、ミシシッピーの両側は偽善と嫌悪に満ちており、いつどこに殺人者や盗賊が現われるかも知れないが、ミシシッピーの大河の中は文明から逃れたinnocentな宿無しと仲間になれ、そこには平和がある。そこでOutcast達はintegrityを追求するのである。具体的にはそれは白鯨であり、熊であり、又旗魚であったりする。彼等はあくまでも自分達の存在を完璧にしておくためには、

状況が不利となれば ‘separate peace’ も辞さないのである。

これら American Hero の美德が個人的なものであるのはいうまでもない。彼等はしばしば家を捨て、家族を捨て、教会を捨てる。彼等はこれらの機関から脱出し、浮浪者となり、川に、海に、森にのがれ、そこにおいて真なるもの、完全なるものを見出だそうとした。その伝統は今も変わっていない。アメリカで有名になり、最近我が国でも大いに反響を呼んだ Richard Bach の Jonathan Livingstone Seagull は、このアメリカ文学の伝統に貫ぬかれた Freedom と Perfection をクエストする物語であるからである。

Richard Bach の Jonathan は空という逃亡の場所をみつけている。かつてのヒーローのような川でもなく、海でもなく、森でもない。それらは悉く ‘civilization’ に浸蝕され、自己を拡大してくれるフロンティアではもはやなくなっているからであって、空のみが American Hero に現在残された唯一の聖域となり得たのである。しかし空への脱出はいわば夢の又夢、即ち寓話である。ヒーローが「かもめ」に姿を変えなければならなかった理由はそこにある。

(2)

The Catcher in the Rye は17才の予備校生 Holden Caulfield が成績不良と無責任の故に Pencey 校を退学させられた後の三日間の放浪の旅を取扱っている。物語の始めて Holden は、カリフォルニアのサナトリウムで精神障害を治療しつつある。彼は自叙伝なんか書くつもりはないが、「たゞ去年のクリスマスの頃へたばっちゃって、西部のこの土地なんかへやってきて、静養しなきゃならなくなったんだが、その直前に、いろいろないかれた経験をした」(this madman stuff that happened to me around last Christmas just before I got pretty run-down and had to come out of here and take it easy [5]¹⁾) 話をしようと言っ

1) J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye* (Penguin Modern Classics).
引用文末の [] 内の数字はすべて本書の頁数をしめす。

ている。そして又彼は終章において「(兄の) D. B. は僕が今君に話し終った以上のようなことを全部ひっくるめて、どう思っているか聞いたんだなあ。実をいうと、どう思っているのか自分でもわからないんだよ」(D.B. asked me what I thought about all this stuff I just finished telling you about. I didn't know what the hell to say.

If you want to know the truth, I don't know what I think about it. [220]) と言っている。この姿は明らかに心の病を療やす大きな川もなく、深く暗い森もなく、果しない平原もなく、ニューヨークのジャングルの中のうす汚れたホテルと、暗い夜のセントラルパークをさまよう孤独なアメリカ人の精神構造をまさしく代弁しているように思われる。

さきに American Hero は行くべき空間をもはや持たないと述べたが、そうなった場合彼等のエネルギーは必然的に反逆へと向かうのは蓋し当然と言えるであろう。そして我々は主人公 Holden の中にその姿を見る。それ故に彼がアメリカの 'traditional hero' であることは彼が他人の 'ego' に対して示す強い反発によって知ることができる。又それは反面 personal なものの追求によって生じたマイナス面の自己拡大を否應なしに認めることにもなるのであって、こゝに 'ego' と 'ego' の衝突は避けられないものとなる。今それらを具体的に観察してみよう。

たとえば Pencey 校を追放されることになった Holden が、別れを告げに立ち寄った教師 Spencer は、こちらが何を言っても耳を傾けてくれることは殆んどなかったし、歴史の試験で落第点をつけたのは君が全く無知だったからだ、Holden がそのことは認めているにも拘らず三度も念を押したあと、読んで欲しくないと断わろうとする言葉に耳もかさず、筆筒の上からその答案を持ってこさせて読み始める。そこには相手の心をおもんばかりの心は微塵も感じられないようである。

この自己中心性は彼の隣室に住む Robert Ackley や、同室の Stradlater の場合はもっと顕著である。Ackley は歯を磨かないため苔に一面おおわれたような不潔きわまる口をし、顔中ひげだらけで、おまけにまったくひどい個性をもった不愉快な奴である。彼はこちらの都合などお構いな

しに、一日に85回位Holdenの部屋に濫入してくる。既に退校ときまったHoldenが荷造りを終えて自室で本を読んでいると、Ackleyが例によってふと紛れこんだといった風情で入ってきて、彼にはお構いなく、いつものようにゆっくりと部屋を歩き廻り、勝手に他人の持物をとって眺めるのである。彼には自分と他人を隔てる境界はなく、それ故に本を読みふけているHoldenにフェンシングの結果を聞くことが出来るのである。それも彼がそのことに興味があるからではない。「彼はたゞ僕が読むのを止め、ひとり楽しむのを止めるのを望んだ」(He(Ackley) just wanted me to quit reading and enjoying myself[24]) だけである。又彼は爪のさかむけを切るために鋏を貸してくれと要求する。その鋏は既に荷造りされて戸棚のずっと上の方へはいつても、他人の事情にはお構いなしである。それでもHoldenはわざわざそれを取り出さなければならない。そして運悪く、その鋏を取出そうとした時、テニスのラケットがもろにHoldenの頭に落ちて大きな音をたてる。こちらは一生懸命激痛を我慢しているのに、「彼はかん高い裏声で笑い出した。ぼくがスーツケースをおろして彼のために鋏を取出してやっている間中、彼は笑いつづけた。何かそんな風なこと — 誰かが石か何かで頭をごつんとやられるといった種類のことはいつもAckleyを途方もなく喜ばせた」 He(Ackley) started laughing in this very high folsetto voice. He kept laughing the whole time I was taking down my suitcase and getting the scissors out for him. Something like that - a guy getting hit on the head with a rock or something - tickled the pants off Ackley. [27]) のである。

こゝにもう一人Ackleyよりも更に自己中心的な男Stradlaterの場合をみよう。彼はHoldenと同室の男だが、自分を色男で人気者だと信じ込み、その意識に支えられて他人に平気で奉仕を強要する。たしかに彼は美男子なのだが、それは年鑑向きの美男子である。Holdenは言う。

You take a very handsome guy, or a guy that thinks he's a real hot-shot, and they're always asking you to do them a big

favour. Just because they' re crazy about themself, they think you' re crazy about them, too. [32]

Stradlaterはそれ故にまさに学校を去って行こうとするHoldenに、厚顔鉄面皮として作文の宿題の代筆をたのむ。しかもそれがHoldenがひそかに恋心を抱いているJane Gallagher とのデートのためなのだ。そしてそれを頼んだ後で大きなあくびをすることが出来る彼である。「それは僕に骨身にこたえる仕草だ。つまり何か頼みをしているあいだに大きなあくびをすることなんだ」(Which is something that gives me a royal pain in the ass. I mean if somebody *yawns* right while they' re asking you to do them a goddam favour. [32])とHoldenは述べている。そしてStradlaterはその揚句Holdenの書いた作文にけちをつけるのである。Holdenの頭にくることはそれだけにとどまらない。StradlaterはHoldenのコートを着、Holdenの整髪剤をつけてデートに出かけていくのである。

今度は女性に目を向けてみよう。Holdenはワシントン州のシアトルからはるばるラジオ・シティのミュージックホールの早朝興業を見るためにやって来た三人の田舎娘にも幻滅する。Penceyの寄宿舎を後にして最初に泊ったニューヨークのホテルのロビーで、彼は彼女等に色目を使ってダンスに誘ったのだが — この色目を使ったHoldenの行為そのものについては後で触れるが — その時彼女等はダンスを終え、酒を飲み終るとHoldenがまだ坐っているのにもかゝらず、勘定が13ドル位になったのにそのことには何も触れず、Holdenを残してさっさと立去るのである。Holdenの心は相手で女性であるためか、AckleyやStradlaterに対する程ではないにしても割切れないものを残す。「僕は彼女達が、僕の加わる前に自分達が飲んだ酒の代金は自分達で払うと、言うだけは言うてしかるべきではないかと思う — そういったからって、僕は勿論彼女達に払わせはしなかったろうが、言うだけは言うのが本当だろう」(I think they should' ve at least offered to pay for the drinks they had had before I joined them — I wouldn' t' ve let them, naturally, but

they should've at least offered. [76]) というHoldenの言葉はまさしく我々の共感するところである。現代ではこゝに描かれているように、丁度Stradlaterが色男と信じ込み、他人は自分に喜んで奉仕するものだと考えているように、女性も男性に奉仕されるのが当然の権利であり恩恵であると考える風潮があるのではなからうか。そうしてこの場合感謝の言葉が仲々彼女等の口から出てこないのである。しかしかくいう女性達の中にもHoldenが心から敬服する女性もいる。それは彼がたまたま出会った尼さん達である。彼女等はHoldenと一緒に朝食をした時、さきの場合とは違って今度はすゝんで代金を拂いたい気持ちになっているHoldenにどうしてもそれを拂わせてくれなかったし、別れ際には、「お話、とても楽しかったわ」(We've enjoyed talking to you so much, [117]) という心使いも持っていたのである。

俗物の範疇に属する女の子でもう一人ガールフレンドのSally について述べなければならない。HoldenはSally の外見上の美しさにまいてしまっているらしいのだが、そしてその美しさのために一時は一緒に西部へ駆落ちしよう、とまで言う女だが、彼女はやはり自分の魅力を見せびらかす以外の何物でもない。劇に連れていってくれたHoldenを無視して劇場内で会ったアイヴイリーグの大学生と長々と、Holdenには当てつけがましく話をする。又クリスマスツリーの飾りつけを手伝ってきてくれるのかを、既にHoldenに云わせれば20回もOKをHoldenからとっているにも拘らず、重ねて念を押すのである。

'I wrote you I would(come).you've asked me that about twenty times. Sure, I am.'

'I mean I have to know,' she said. She started looking all around the goddam room. [135-136]

この彼女の態度にはいわゆる「つゝましさ」と言えるものはない。そして結局は二人は喧嘩別れとなり、Holdenは彼女にマサチューセッツかヴァーモントに一緒に行つて暮そうと衝動的にも言ったことを後悔し、「かりに彼女が一緒に行こうと言つたとしても、僕は恐らく彼女を連れ

て行かなかったらと思うな。誰かを連れていくにしても彼女を連れて行くことはなかったらと思うんだ」(I probably wouldn't've taken her even if she'd wanted to go with me. She wouldn't have been anybody to go with. [140]) という状況にまで至るのである。

(3)

次にHoldenの嘔吐の鋒先は、直接彼に被害を及ぼさないにしてもこの世に充滿していると彼には思われる *phoney* なものへと向けられる。それはまずこの作品の冒頭のPencey 予備校そのものから始まる。彼はPencey校の「いかさま」を次の如く批判する。

They advertise in about a thousand magazines, always showing some hot-shot buy on a horse jumping over a fence. Like as if all you ever did at Pencey was play polo all the time. I never even once saw a horse anywhere *near* the place. And underneath the guy on the horse's picture it always says: Since 1888 we have been moulding boys into splendid, clear-thinking young men.' Strictly for the birds. They don't do any damn more *moulding* at Pencey than they do at any other school. And I didn't know anybody there that was splendid and clear-thinking and all. Maybe two guys. If that many. And they probably *come* to Pencey that way. [6]

Pencey校の広告は、このような調子である。特にSalingerがイタリックで書いているところに注目したい。学校側は優秀なる青年を養成して来たというが、実はそういう青年がいたとしても、彼等は本校に既にそういう状態で来ただけのことなんだ、とHoldenは言う。優秀な人間が出れば学校や教師は自分の手柄だとし、その反対の場合はその責任は本人に押しつける。

HoldenがPenceyの前に退校したElton Hills校のHaas 校長についてもその「いんちき」振りは次のようである。この年代とHoldenに特有のややオーバーな言い方ではあるにしても、まさに事実を穿った観察をしているので、少し長いがあえて引用することにする。Haas校長は父親の

経済力や母親の美醜によって彼等に接する態度を変える。

For instance, they had this headmaster, Mr. Haas, that was the phoniest bastard I ever met in my life……On Sundays, for instance, old Haas went around shaking hands with everybody's parents when they drove up to school. He'd be charming as hell and all. Except if some boy had little old funny-looking parents. You should've seen the way he did with my room-mate's parents. I mean if a boy's mother was fat or corny-looking or something, and if somebody's father was one of those guys that wear those suits with very big shoulders and corny black-and-white shoes, then old Haas would just shake hands with them and give them a phoney smile and then he'd go talk, for maybe a half an *hour*, with somebody else's parents. [18]

くどいようだが今少しHoldenと共にPhoneyなものをみてみたい。というのもこの作品が年輩者も含め特に若い世代に人気を博したのは、その大半がその「いんちき」の暴露の痛快さにあると想像されるからである。

さきにも触れたけれどもHoldenが小さな軽食堂で朝食をとっている時に知り合った尼さん達の安もののスーツケースをさげ、貧しい朝食を食べているにも拘らず、そのやさしい言葉や心に打たれて彼は思わず彼女等が辞退するのを無理に10ドル寄付する場面があるが、それからHoldenは彼女等のことを考えつづけているうちに — これは勿論考えつづけるを得ない程感銘を受けたためなのだが — 彼のおふくろや彼の叔母や、Sallyの母親が寄付集めをしている図を考えてみる。しかしこれら三人が — 特にあとの二人が — この尼さん達のように、くたびれた麦わかのバスケットなどを持って金を集めているところなどとても想像されないのである。叔母などはなかなかの慈善家で、赤十字の仕事なども大いにやっているのだが、そういう時にも服装はうるさいのである。Holdenには、「なんか慈善の仕事をしている時にもいつもいゝ服を着ているし、口紅なんかもつけているんだ。ぼくは叔母がそれをしている間、黒い服

を着、口紅なんかもつけないのだったら、慈善の仕事をしているところは想像出来なかった)(— but she's very well-dressed and all, and when she does anything charitable she's always very well dressed and has lipstick on and all that crap. I wouldn't picture her doing anything for charity if she had to wear black clothes and no lipstick while she was doing it. [120]) のである。又 Sally のおふくろさんなんかだったら、献金する人達が三拝九拝する位でないで一時間位でさっさと止めて、しゃれた店へ昼飯を食べに行きそうにHoldenには思えるのであった。その他Holdenには俳優の演技に「いんちき」を認めたり、Antolini先生夫妻の何気ない会話の中に二人の心の乖離をのぞきみるところなど、このような事例は他にもいくつか挙げることが出来よう。

(4)

しかしこゝで一般的にいつてHoldenが今までのAmerican Heroと異なっている最大の注目すべき点は彼が彼自身の中に認める 'ego' であり、弱点である。彼は夜汽車に乗る時は4冊ほども娯楽誌を買いこんでLindaとかMarciaとかいう、いゝかげんな女の子の登場する怪しげな読み物を読むし、列車で隣り合わせた40才台の友人の母親の美しさにひかれて、好意以上のセックスアピールを感じたりする。その上彼女の御機嫌をとるために自分の名前を偽って彼女の息子のErnest Morrowを心の中では下司野郎とののしりながら、口さら出まかせに褒めそやす。Holdenは自分自身も認める如く、「僕みたいにひどい嘘つきにはお目にかゝれないだろう。すごいんだ。かりに雑誌のようなものを買に行く途中で誰かに会って、どこへ行くんだ、ときかされるとするだろう。僕はオペラ²⁾へ行くって答えかねないんだ」(I'M the most terrific liar you ever saw in your life. It's awful. If I'm on my way to the store to buy a magazine, even, and somebody asks me where I'm going, I'm liable to say I'm going to the opera. [20]) といった調子である。

2) オペラのようなところへ行くのは高尚なイメージを与えるからである。

又彼はまだ未成年にもかゝらず相当のヘヴィスマーカーであるし、飲酒もほぼ習慣的になっている。年令をいつわって酒を注文し、程よく断わられたりしている。それに彼の非行性ともいふべきものは、Morrowの母親の場合のように対女性関係、セックス面においてかなり明らかな徴候をみせている。彼はホテルで異常な性倒錯者たちの行為に驚き圧倒されるが、かえってそれに興味を抱いたりする。そして、

The trouble was, that kind of junk is sort of fascinating to watch, even if you don't want it to be. For instance, that girl that was getting water squirted all over her face, she was pretty good-looking. I mean that's my big trouble. In my *mind* I'm probably the biggest sex maniac you ever saw. [66]

と云って自己のセックスへの関心を赤裸々にさらけ出す。その彼の 'sex maniac' 振りを更に例証すれば、この大人達の異様な行為を目撃したあとで、以前プリンストン大学の友人が教えてくれたアルバイトのコールガールに電話をしてみたり、— これは深夜だという理由で断られるが— その後先にも触れたシアトルから来た女性達に近寄り、その中のブロンドの女が好きになってダンスをした後で、「あまり美人でなくても、又少々頭がいかれていても一寸きれいだと惚れてしまうんだ。そうするともう何が何だかわからなくなってしまう。女の子か、いやになってしまう。こっちをのぼせちゃうんだからな」(Everytime they do something pretty even if they're not much to look at, or even if they're sort of stupid, you fall half in love with them, and then you never know *where* the hell you are. Girls. Jeaus Christ. They can drive you crazy. [77])と言う。

このようなHoldenの姿は日本の私小説によくみられるような、自分自身を一種の 'outcast', 'madman' という位置に置いているように思われる。これも一つの反抗のしるしともいえるし、別の角度からの 'ego' の表現であり、「個」の形成、自己拡大へのもがきとも考えられる。そしてその延長線上にあるのが次の引用が証明するHoldenの自己意識である。即ち

俳優は「演技」をやるという嫌うHoldenが反対に自身俳優となって自己宣伝をする場面である。Stradlaterがひげを剃っている鏡に向かってHoldenはタップダンスを踊る。彼が見ているからHoldenは踊るのである、と宣云する。「観客さえあれば僕は外には何にもいらぬ男なんだ。何しろ僕は自己宣伝屋なんだから」(All I need's an audience. I'm an exhibitionist. [33])と、思わず彼が‘phoney’と罵倒しているものを自らの中に発見している。

(5)

さて今まで考察してきたことは‘ego’を非難するHolden自身も認める彼自身の‘ego’の表現であった。しかしHolden自身の気づかないegoも又彼自身の中に存在している。それは彼の環境から生ずるものかも知れないが、彼の深層心理にみられる中産階級の意識ともいわれるものである。Holdenが退校になってすぐに訪問したSpencer先生の宅で奥さんがドアに出た時、「先生のところには女中なんかいないんだ。ドアはいつも先生か奥さんが自分で開けるんだ。あまり金持ではないからなあ」(They didn't have a maid or anything and they always opened the door themselves. They didn't have too much dough. [9])と言っている。彼が軽蔑する成功者タイプの男である父のおかげで彼の自宅には女中がいることへの意識がその背後にあるのであろう³⁾。そして

3) Holdenは父の職業である弁護士について次のように言っている。

I mean they (lawyers) 're all right if they go around saving innocent guys' lives all the time, and like that, but you don't do that kind of stuff if you're a lawyer. All you do is make a lot of dough and play golf and play bridge and buy cars and drink martinis and look like a hot-shot. And besides. Even if you did go around saving guys' lives and all, how would you know if you did it because what you really wanted to save guys' lives, or you did it because what you really wanted to do was be a terrific lawyer, with everybody slapping you on the back and congratulating you in court when the goddam trial was over, the reporters and everybody, the way it is in the dirty movies ?[178-9]

又第四章で冗談とはいゝながら「おれは知事の息子だ」(I'm the goddam Governer's son, [33]) と、タップダンスのステップを踏みながら、「おやじは俺をオックスフォードへ行かせたいんだ。しかしおれの血の中に入っちゃったんだなあ、このタップダンスが」(He wants me to go to Oxford. But it's in my goddam blood, tap dancing. [33]) と言う時、そこにはある優越感が顔をのぞかせている。又 Stradlater に貸す彼のコートも上等物らしいし、それに対して Elkton Hills 校でのルームメイト Dick Slagle や尼さんの質素な旅行カバンには見下した描写が目につく。彼のいみ嫌う映画にも何回か Ackley 達と出かけているし、ニューヨークでの二日目には劇場に一人で入っている。Salley とのことにしても彼女を「いんちきの女王」と呼びながら、彼女と一緒に気まぐれにせよ、マサチューセッツやヴァーモントに誘うことなど、それらがカタルシスにしる 'phoney' の摘発者としての Holden の自己撞着の批判はまぬがれることは出来ないであろう。

冒頭でも述べたように、嘗ての American Hero は「個」の拡大と完成を求めて「悪といんちき」から逃れ、川へ、森へ、海へ、そして空へとさまよい、そこで自己を激しく燃焼させた。それは Antolini 先生が Holden に向かっている、「未成熟な人間の特徴はことにあたって高貴な死を選ぶ、ところが成熟した人間の特徴は、ことにあたってつゝましく生きる方を選ぶことだ」(“The mark of immature man is that he wants to decide to die nobly for a cause, while the mark of the mature man is that he wants to live humbly for one.” [195]) という精神分析学者 Wilhelm Stekel の言葉でいえばそれは未成熟の人間の特徴をもった主人公達であった。そしてその 'immature' ということは又 'young' の特徴でもある。その意味でアメリカ文学は又青年の文学でもあったのである。Antolini 先生は Holden に成熟した人間になるよう暗に説いたのであろう。しかし、こゝで特に問題としたいのは筆者が「アメリカ文学は青年の文学であつた」と過去形を用いた点である。いや現在完了形と

いった方がよいかも知れない。文学思潮において、これまでが過去形で、これからが現在、又は未来と厳然たる一線を引くことは不可能であろうから。しかしSalingerのこの*The Catcher in the Rye*は、その中に今まで考察して来たHoldenの言動の中の「個」の追求と、これから考察する彼の言動の中の「全」の探求をあわせ持ち、その意味でこれまでの青年文学としての要素と、大人の文学として要素の谷間にある作品であることをうかがい知ることが出来るのである。それでは次にその「全」の面をみることにしよう。

(6)

Holdenの今までの拒絶と反抗の姿勢の反面に彼には仏教用語でいう「一切衆生」への愛の芽生えに読者は気づかずにはいられない。それは先づ動物、特にアヒルのような弱く無力なものへの同情となってもあらわれている。彼はSpencer先生の説教を聞きながら、セントラルパークのアヒルは冬どうして生きのびるかに関心を持ち、後にタクシーの運転手に尋ねる。「セントラルパーク・サウスのすぐ近くにあるあの池にアヒルがいるだろう？あの小さな湖さ。ひょっとして、彼等が、あのアヒルだけど、水が凍った時なんかどこへ行くか知らないかね？」(‘You know those ducks in that lagoon right near Central Park South? That little lake? By any chance, do you happen to know where they go, the ducks, when it gets all frozen over? [64])。勿論運転手は知る筈もなかった。二回目にアヒルに彼が言及するのは兄貴のD. B. がよく行っていたErnieの店に立寄っての帰り、これもタクシーの運転手に、「アヒルだよ。ひょっとして知らないかなあ。つまりだね、だれかがトラックか何かでやってきて連れていくのかね。それとも一人で飛んで行くのだろうか。南の方のどこかへさ」(The ducks. Do you know, by any chance? I mean, does anybody come around in a truck or something and take them away, or do they fly away by themselves go south or something? [86])と尋ねている。そして最後はSallyにも、友人のLuceにも肘鉄をくらって行づまり、寂しさに耐えかねて自

分自身そこを訪ねて検分している。

Holdenは又‘phoney’でないものを見出す時次々にさわやかな気分になる。ニューヨークの自然博物館に飾ってある巨竜の骨や、インディアンの人形などは、彼の小学校時代に先生に連れられて訪れ、いつも一緒に手を握りあって見物した汗ばんだ女の子の思い出と共に永遠のシンボルであり、—「けれどもその博物館で一番いい事はすべてのものがいつも同じところにあるということなんだ」(The best thing, though, in that museum, was that everything always stayed right where it was. [127])とHoldenは言う—又この博物館自体がとてもい、匂いがし、「雨が降っていない時でも、外は雨が降っていて自分達だけ雨のあたらない所にいるような気にさせる」(It(The Auditorium) always smelled like it was raining outside, even if it wasn't, and you were in the only, nice, dry, cozy place in the world. [126])。又人間について例をあげれば、自分が退校とは知らずにアイス・スケートを送ってくれた母の無執の愛情や、Seton Hotelの携帯品係りの女性のやさしい心使いに、又Pencey校の校長の娘のおやじを鼻にかけない態度にも彼はナイスなものを感じるのである。しかしとりわけ彼を印象づけたものは、自分の言を取消すように言われ、6人ものろくでなしに部屋に侵入され中から鍵をかけられて、とてもひどいことをされても、頑として自分の言葉を翻さず、窓からとび降りて死んだ、小さな、弱々しい、手首なんか鉛筆位しかないJames Castleの純粹さであり、そしてその死体に自分の上着をかぶせて血だらけになるのも厭わず診察室まで運んだAntolini先生の勇気であった。SalingerがHoldenによって人間の内面にひそむ善なる弦を一本一本うち鳴らしていく時、我々ははっとその美しい旋律にあらためて心を揺り動かされる。そしてそのことは、とりもなおさず、我々がその美の弦の旋律を通常あまり聞くことのない證左ともいえるのである。

しかし何といってもHoldenの最も愛するもののチャンピオンは妹のPhoebeであろう。彼女こそHoldenの彼岸の化身なのである。Holdenが

夜、抜き足さし足で自宅のアパートに入った時のシーンは、彼女の純心無垢をあらわす最もすばらしいシーンであり、Holdenはその時直ちに胸にしびれる暖かさを感じるのである。

“Holden!” she said right away. She put her arms around my neck and all. She’s very affectionate. I mean she’s quite affectionate, for a child. Sometimes she’s even *too* affectionate. I sort of gave her a kiss, and she said, “When ja get home?” She was glad as hell to see me. You could tell. [168]

母親がやがて帰ってきて、彼女に見つからぬように Antolini 先生をたづねて行こうとする間に、Holden は Phoebe に少し金を貸してくれるよう頼んだところ、彼女はクリスマスのお小づかいを 8 ドル 65 セント全部 Holden に渡そうとするのである。Holden は留めどもなく流れる涙をどうすることもできない。彼女の ‘ego’ を無にした姿に Holden は遂に号泣せざるを得ないのである。

しかし Antolini 先生のうちに泊めてもらって眠っている時、ふと目を覚ますと先生が自分の頭をなでているのを発見し、先生をホモダと思つて夜明け近い頃街中へとび出した Holden は自分が下へ下へと沈んでいくような気分になり、汗が流れ出してきた。彼は死んだ弟の Allie に、「アリー、僕の身体を消さないでくれ」(Allie, don’t let me disappear. [204]) と何度か呼びかけ、元気を出してベンチにたどりつき、一時間ばかり休んでいるうちに、彼はある決心をするのである。それはどこか遠くへ行ってしまおうという決心であった。Phoebe の無垢な子供の心に洗われた感激も、この今の彼の追いつめられた出口のない心理を開く窓にはならなかったのである。彼はかつての American Hero よろしく脱出をくだてるのだ。

Finally, what I decided I’d do, I decided I’d go away. I decided I’d never go home again and I’d never go away to another school again. I decided I’d just see old Phoebe and sort of say good-bye to her and all, and give her back her Christmas

dough, and then I'd start hitch-hiking my way out west. What I'd do, I figured I'd go down to the Holland Tunnel and bum a ride, and then I'd bum another one, and another one, and another one, and another one, and in a few days I'd be somewhere out west where it was very pretty and sunny and where nobody'd know me and I'd get a job. I figured I would get a job at a filling station somewhere, putting gas and oil in people's cars. [205]

しかしHoldenは既にこの西部にも完全な脱出の空間はないことを知っている。その証拠に、彼はたとえそこへ行ったとしても啞でつんぼのふりをしなければならないからである。陽のあたる林のそばで、邸宅ならぬ小屋を建てて、同様に啞で聾の娘と結婚し、子供もどこかへ隠しておいて、自分達だけで読み書きを教えてやらなければならないからである。こゝには「個」の追求の空間も失ない、'deadlock' にのりあげて苦悩するHoldenの、そしてアメリカの姿がある。そして今Salingerは、どのようにしてHoldenに突破口を見出させようとするであろうか。

(7)

HoldenがPhoebe と会う約束の水曜日まで待っていられなくて、西部へヒッチハイクで出かけることにしたので博物館のところで待っているから彼女から借りたクリスマスのおこづかいの残りを取りにくるようという手紙を学校にとゞけ、博物館の約束の場所で待っていると、大きな旅行カバンをさげて彼女はやってきて、自分も一緒に西部へ連れていってくれと言った時、Holdenはぶっ倒れる程驚いたのである。Holdenは自分を一人西部へ送るのにしのびないPhoebe の心に遂に負け、西部行を断念するのである。いやむしろ断念するというよりも意識の転換が起ったのである。Holdenには西部でPhoebe を幸せにする自信がなかったと同時に、「個」を捨てたPhoebe に目覚まされたのである。それはHoldenが「個」を捨てて、「全」の中にとび込むより外に彼等の進むべき道がないことを直感的に認識したことであり、東洋的に言えば「悟りを開いた」

ことである。しかし我々はこのHoldenの悟りが、たゞPhoebeの行為のみによって忽然と空から降ってきたように花開いたと考えることは出来ない。そこにはそこまで至る道程の中で、「悟り」への養分が培われ、蓄となって準備されていなければならないからである。それは一つには既に考察したか弱いアヒルや、質素な尼さんなどの‘ego’のない純粹なものを見つけ出すHoldenの心であったが、今一つは彼がいみ嫌うegoにとりつかれた人間共の中にも美点を見出そうとする更に積極的なHoldenの心の存在である。そしてその後者の心がなければ「一切衆生への愛」は生まれえない。

Holdenはあれ程その無神経さに嘔吐をもよおしていたAckleyについても、StradlaterとJaneのことで喧嘩をした後で放心と空虚さの中で坐っていた時、いつもの如くシャワーのカーテンを突き明けて入ってきたAckleyについて、「ぼくの馬鹿げた生涯のうちでも、この時だけは奴がきてくれて本当に嬉しかった」(For once in my stupid life, I was really glad to see him. [38])と言い、又当のStradlaterについても彼の「腹のすわったこと」(guts [23])を認めている。又Whooton校時代のstudent advisorであるにもかゝらず、13才で童貞を失い、下級生にセックスの話ばかりしていた、女性についてのベテランCarl LuceにHoldenがSallyのことで気をめ入らせて意見を求める時、話途中で去ろうとする彼に「もう一杯だけ飲んで行ってくれ。……たのむから。僕はとてもさみしいんだ。本当なんだ」(‘Have just one more drink,’ …… ‘Please. I’m lonesome as hell. No kidding.’ [155])と呼びかける。しかし彼は断わる。だがHoldenは彼について考えるのである。

Old Luce. He was strictly a pain in the ass, but he certainly had a good vocabulary. He had the largest vocabulary of any boy at Whooton when I was there. They gave us a test. [155]

そして何よりもHoldenが「全」へ近づこうとしている根拠は、彼がいつも誰かに電話をかけていることである。いつも誰かに反発しながら誰かに会っていることである。Spencer先生やAntolini先生を訪ねるのも

コミュニケーションを求めざるをえないHoldenの姿の一面である。コールガールのSunnyでさえも彼のホテルのうす汚ない一室での孤独をまぎらわすものとみられなくもない。かつてのAmerican Hero 達を思いおこす時、彼等はこれ程人恋しく思っただろうか。HoldenがPhoebe によって西部への脱出から引きもどされる素地はそれまでに十分と、のっていたのである。

こゝでHoldenがHemingwayの*A Farewell to Arms* について述べていることを是非付言しておきたい。Holden は次のように言っている。

What gets me about D. B., though, he hated the war so much, and yet he got me to read this book *A Farewell to Arms* last summer. He said it was so terrific. That's what I can't understand. It had this guy in it named Lieutenant Henry that was supposed to be a nice guy and all. I don't see how D. B. could hate the Army and war and all so much and still like a phoney book like that. [146-147]

こゝでHoldenが言っていることは、主人公のLieutenant Henry が決して戦争を嫌ってはいないということであり、それは戦争が「個」を主張し — その場面国と国との間の「個」の激突の関係になるが —、かの有名な言葉 'separate peace' も又「個」を主張していることになるからであり、「全」から離れていく性質のものだからである⁴⁾。

Phoebe が回転木馬にのって雨の中を無心に興じる姿にHoldenは突然「幸福」な気持ちになり、こゝで彼は完全に「個」から、即ち「自我」から断ち切られ、「全」と「融合」の世界に入りこんでいく。

I felt damn happy all of a sudden, the way old Phoebe kept going round and round. I was damn near bawling. I felt damn happy, if you want to know the truth. I don't know why. I was just that she looked so damn *nice*, the way she kept going

4) このことについては拙稿、「Frederic Henryの虚像」下関商経論集第18巻3号を参照されたい。

round and round, in her blue coat and all. God, I wish you could've been there. [219]

このHoldenの幸福感、それは現実をあるがまゝに受入れ、その現実の中に調和の美を見出すことを悟ったためであろう。それは自然を征服するという西洋的な「個」の確立ではなく、自然の中に溶けこむという東洋的な攝取不捨の思想である。「僕にわかっていることは、僕が話した連中がいまいないのを寂しく思っていることなんだ。たとえばストラドレーターやアクリーでさえもそうなんだ」(About all I know is, I sort of miss everybody I told about. Even old Stradlater and Ackley, for instance. [220]) というHoldenの気持はそのことを明確に表現している。

(8)

この作品はPeter J. Seng⁵⁾が言っているような子供から大人になることの難しさとその経移を描いたものだけのものでは決してない。それは現在のアメリカを鏡にうつしだしたすぐれた作品であり、アメリカの曲り角を示すものである。その曲り角は、「個」から「全」への移行であり、そういう潮の中で個の殻を容易に脱することの出来ない人々のものがきでもある。Holdenが精神療養所に入ったこと自体、一旦は「悟り」に達したものの、なおその自我という「多頭の怪物」に翻弄されて精神のバランスを失っていることを意味するのである。…それを更に実証するものとして我々はSalingerの次の作品*Franny and Zooey*をもっている。こ

5) Salinger himself is reported to have said that he regretted that his novel might be kept out of the reach of children. It is hard to guess at the motives behind his remark, but one of them may have been that he was trying to tell young people how difficult it was to move from their world into the world of adults. He may have been trying to warn them against the pitfalls of the transition. (Peter J. Seng, "The Fallen Idol: The Immature World of Holden Caulfield," compiled in Salinger's *CATCHER IN THE RYE: Clamor vs. Criticism* p. 70.)

の作品ではFrannyはまだ‘ego’を持てあましている。そしてZooneyはそれを征服している。*The Catcher in the Rye*の主人公Holdenはこの二人を彼の中に共存させている人物といえるのではなからうか。山頭火というわが国の俳人は「個は全より別れて全に帰る」とその日記の中にしるしている。我々は‘ego’の追求を全面的に否定するものではないし、又そのegoがバイタリティを持ち、それ故にHoldenのもつ批判精神も生みだされると共に、文学的にはその‘ego’が面白さの一面を形成していることは事実であるが、Zooney的な視点からの全体的な事物の把握も又全般的なレベルでの人間の幸福のためには欠くべからざるものであり、又必然性として要求されるものであることをこのSalingerのアメリカ内部の告発によっても又知らされるのである。

(1976. 7. 30)